鼻　毛

松浦敬親

今回は自作を振り返り、鼻毛の効用について書いておく。

①天牛を感電したるごと放す

幼年時代の純然たる体験で、本人は大真面目なのだが、滑稽味があると言う人も居る。言われてみて成程と思ったが、滑稽を意図して作った句ではない。兜虫や鍬形虫は平気だったが、髪切虫は小学校の高学年になるまで敬遠した。そんなトラウマ（精神的外傷）を込めた句である。

②少年に李の溝のまぶしさよ

これも純然たる体験だが、おかしみは意識していた。李はいきなりガブリと行く場合もあるが、少し磨いて綺麗にしてから食べたからだ。酸桃と書きたい思い出である。

③秋近き消しゴム急に痩せにけり

これも純然たる体験で、小学校時代のことだ。学校が嫌いで、そこは大人達が子供達を集めて苛める場所だと思っていた。肺結核で要注意とされ、体操も見学にされて、体操のある日には腹痛や頭痛がして学校に行けなくなったほどだ。だから、宿題もせず、夏休み中も遊び惚けて、よく叱られた。夏休み帳にかかるのもお盆の前あたりで、消しゴムをやたら使った。特に絵の宿題の下絵を描いていると、消しゴムが急に痩せて丸くなり、よ

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

く転がってプチ家出をしたものだ。そんなトラウマを含む句である。

④木瓜の実の取って付けたるごとくあり

これは純然たる写生句である。実が枝に張りつくように形成されるので、こう見えるのだ。名は体を表すというが、実の形とボケの名も、「取って付けたる」を納得させるだろう。

⑤ほどほどの出世を祝ふはまちかな

これは実体験ではない。鰤が出世魚であることを前提に、正月でも鰤よりハマチを食べた子供時代の食文化（食習慣）からの発想である。東京ではワカシ・イナダ・ワラサ・ブリと出世するが、大阪ではツバス・ハマチ・メジロ・ブリと出世する。幼魚は流れ藻に付いて生活するので、モジャコと言う。養殖の鰤は、東京でもハマチと呼ぶ。

⑥四の中に鼻毛が二本四月馬鹿

これは、「四」の字をよく見ての写生句である。これを写生句と言うと怒る人も居るだろうが、私にとっては写生句なのだから仕方がない。四月馬鹿の「四」の字をよくよく見つめていると、よくわかる。何だか鼻の奥がむずむずして来て、「これでいいのだ！」と合点が行くから…。

⑦打ち水の女将に塩を撒かれけり（未発表）

これは全くのフィクションである。私は謹厳実直な男だから、料理屋に

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

ツケを溜め込んで踏み倒すようなことは絶対にしない。だからこそ、時としてこういう空想に遊びたくなる。

　ところが、世の中にはこれを事実と決めつけ悪い噂を流す人も居る。滑稽なことだが、身から出た錆だから仕方がない。そんな時は、その錆も侘寂の一種だと思い、①から④に戻ることにしている。そして、時々⑥へと足を伸ばして溜飲を下げる。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。